

タイトル：天の橋架け

著者名：粟生深泥

あらすじ：幼い頃、雨の七夕の夜に「いつか天の川に橋を架ける」と約束した宮津は橋の設計に携わっていた。難条件の設計に後輩の遥と挑む途中、幼い頃の約束の記憶から条件をクリアする設計を思いつく。設計を思いついた理由を語る宮津だったが、遥こそが幼き日の約束の相手だった。

本編の文字数：5,000 字

キャンプ場からほど近い展望台。

パラパラと小雨が降る夜の闇の中、僕より少し年下らしい女の子が傘もささずに空を見上げていた。

小学校低学年くらいの女の子につられるように空を見上げてみるけど、暗がりの中に雲が広がるだけで、綺麗に見えると噂だった星空は雲の向こう側に隠れてしまっていた。

辺りには誰もいない。星空が綺麗なキャンプ場だったけど、生憎の空模様だからかひっそりと寝静まっているようだった。

そんな中、女の子はかけていた丸い眼鏡を外すと、両手で持って雨空に掲げる。

「なにしてるの？」

思わず声をかけると、女の子はちらっと僕を見てからすぐに空に視線を戻す。

「織姫さんと彦星さんが、かわいそうだから」

雨に濡れながら、女の子は一生懸命眼鏡を掲げている。

今日は七夕。本当なら雲の向こうには満天の天の川が見えているはずだった。

つまり、女の子は雨の天の川を渡って織姫と彦星が出会うための橋を架けているのだ。

「どんな願い事したの？」

織姫と彦星が出会えないと、短冊に書いた願い事は叶わないらしい。

だから、この女の子はきっと大切な願い事をして、どうしても織姫と彦星に出会ってもらわないと困るんだろう。

そう思ったけど、女の子は眼鏡を掲げたまま首を傾げた。

「なにも」

「なにも？ なら、なんで橋をかけるの？」

「一年に一度しか出会えないのに、今日も会えないなんてさびしいよ」

願い事とか関係なく、ただ織姫と彦星のためだけに雨に濡れながら雲の向こうの天の川に橋を架けているらしい。

短冊に書いた自分の願いごとを叶えることしか考えていなかった自分が恥ずかしい。

居てもたってもいられなくなって、右手で傘を差しだして、左手で女の子の持つ眼鏡を支える。

それまでずっと夜空を見上げ続けていた女の子が、ビックリしたように僕を見た。

「橋って、両側から支えた方がしっかりするんだって」

お父さんから教えてもらったことを、言い訳みたいに口元でモゴモゴと転がしながら、女の子の眼鏡を支える。

どれくらいたったのだろうか。二人でじっと夜空に向かって眼鏡を掲げていると、小降りだった雨が止んだ。そのままじっと空を見上げてみると、強く吹き抜けていく風に揺られるようにして雲が動いていき、空に小さな切れ目ができた。

「橋だっ！」

女の子の嬉しそうな声が響く。

雲の切れ間の向こうに、きらきらと光る星が見えた。

それは川を渡る橋ではなくて、川がつくった橋だけど。

「わあっ……」

曇り空に浮かぶ一筋の光る川に女の子の声が零れる。

今頃、織姫と彦星は川の真ん中で出会えているだろうか。

「いつか、僕が天の川に橋を架けるよ」

「すごい！ そしたらいつでも会えるね！」

出会ったばかりの女の子に、僕はそんな遠い遠い約束を口にしていった。

\*

「宮津先輩っ！」

ぐいっと肩を揺らされて目を覚ます。

顔を上げると、眼鏡のレンズ越しに困り顔の内海遥が見えた。その周囲に広がるのは俺の地元の島にある知る人ぞ知るキャンプ場ではなく、嫌って程見慣れたいつものオフィスだった。

残業していたはずが、寝落ちしてしまっていたらしい。窓の外はとっくに日が落ちて真っ暗だった。さっきまで見ていた夢のせいか、星空が綺麗に見えそうだななんて場違いなことを考えてしまう。

「宮津先輩以外、みんな帰りましたよ」

目を覚ました俺に遥は呆れた様子でため息をついてみせる。

眼鏡を外して目元を擦ると段々と頭が冴えてきた。そうだ、明日までに橋の形状を考えなければいけないと、頭を悩ませていたんだった。

本土と島を結ぶ大橋構想。その基本計画を考える仕事を受注した。といっても、うちの会社は大手建設コンサルタントの下請けで、受注したのはいいのだけど、本土と島で求める橋の性能は全然違うし、事前に聞いていた自然条件は実際に計ってみると全然異なっていたし、後から橋の下を大型船を通せという条件が出てきたりと、プロジェクトは計画をたてる段階から暗礁に乗り上げていた。

それでも明日までに元請けに大まかな方向性を示さなければいけない。そのために残業をしていたわけだけど。

「みんな帰ったってことは、何かいい案が出たのか？」

明日までの仕事があって誰も残っていないということは、俺が寝ている間に問題が解決したのだろうか。

そうであってほしいと思ったけど、遥は渋い顔で首を横に振る。

「諦めて帰ったんですよ。こんなに後出しで色々条件が付けくわえられるのは元請けの見込みが甘かったんだから、そんなスケジュール守る必要ないって」

「マジか……」

寝落ちしていた俺が言えることではないけど、そんな風に諦めてしまっていていいのだろうか。

色々条件が出てくるのだから地元が長年待ち望んできた橋だからだ。その地元の片方は自分の生まれ育った島であって、公私混同と言われるかもしれないけど、どうにか橋を架けたかった。

「それで、遥は？」

「宮津先輩待ちの決裁があって、帰れなかったんですよ」

「あ、そうか。悪い」

そうだ、今朝、遥から決裁のことを頼まれていたのに忙しくて忘れていた。急いでパソコンを立ち上げると、決裁システムを呼びだして遥の案件を処理する。中身はざっと見ただけだけど、遥の仕事なら心配ないだろう。

遥は去年入社した新人だったけど、小さい頃から橋に興味があって色々勉強していたらしく大学生の時に既に学会でも噂の学生だった。社会人になってからもその能力を遺憾なく発揮していて、なんでそんなスーパー新人がうちみたいな中小コンサルに入ったのか、社内の誰もが首を傾げている。入社五年目の俺が先輩として指導役に当てられてるけど、正直俺が教える事なんてほとんどなかった。

「先輩、まだ仕事するんですか？」

「ん。橋のこと、諦められそうにないし」

眠気覚ましに立ち上がって、オフィスの中心に置かれた模型に近づいてみる。

それは本土と島を繋ぐ橋で当初計画されていた吊橋の模型。当初は設計的に難しい条件もなく、誰もが割のいい案件だと考えていた。

ところが、蓋を開けてみると海流や風圧、船を通すために求められる高さなど、ありとあらゆる条件が変わっていき、気がついた時にはほとんどない筋悪の案件に変わり果てていた。

「なあ、遥。若い頭でなんか良いアイデア浮かばない？」

「宮津先輩もまだまだ若いでしょうに」

雑談がてらのムチャブリだったけど、遥は顎に手を当てると模型を見つめてじっと考え

込む。ここで適当に流さずに正面から向き合う性格だからこそ、遥は一流の設計者となる素質を秘めているのだろう。

「難しいですね。天の川に橋を架けろって言われてるような気分です」

顎に手を当てたまま遥が苦笑を浮かべる。天の川に、橋を。さっきまで見ていた夢のせいか、何気ない一言に心臓がドクドクと加速した感じがした。

夢で見た昔の光景が脳裏をよぎる。

天の川に架ける橋。雨の夜に掲げた眼鏡。両側から支えることで強くなる。

導かれるように眼鏡を外して模型にかざしてみる。偶然にも、俺の眼鏡は本土と島をぴったり渡す橋となった。

「宮津先輩？」

遥が怪訝な顔でこちらを見ている。そりゃあ、そうだろう。いきなり先輩が眼鏡を橋にし始めたら、追い込まれすぎておかしくなったと思っても仕方ない。

だけど、頭の中でパチパチとピースがはまる感じがしていた。いてもたってもいられず、打ち合わせ用に使うホワイトボードを持ち出して、頭に浮かんだ橋のイメージを描きつける。

斜張橋とアーチ橋を組み合わせた構造を二つ並べる。昔読んだ論文で見かけたことがあるし、海外では実際にこの構造でつくられた橋があったはずだ。

それに、大きな二つのアーチが本土と島を渡す様子はまるで――。

「眼鏡橋」

遥がぼろりと零した声に頷く。もし本当にこんなものが海に架かったら、海面に映る二つのアーチはとんでもなく大きな眼鏡を描くだろう。

「これなら橋の強度も、海面から桁下までの高さも確保できて、経済的にもどうにかなりそうじゃないか？」

それは空から降ってきた予感みたいなものだけど、不思議と上手くいく自信があった。

俺がホワイトボードに書きなぐった眼鏡橋を遥がゆっくり触れて辿っていく。その瞳はキラキラと光って見えて、子どもの頃に見た天の川が描いた橋を思い出した。

「いけるかもしれません。朝までに概略の数値なら計算できます」

「いや、流石にそれは……」

自信があるといっても、根拠はない。そんなものに付き合わせて後輩に徹夜させるわけにはいかない。

だけど、俺が言い淀んでいる間に遥は自分のデスクに戻ると設計ソフトを起動させていた。

「ここでお預けにされる方がヒドいですよ。簡単なモデル組むので、先輩はシミュレーションの準備をお願いします」

「とんだワーカーホリックだな」

「そういうのは鏡見てから言ってください」

遥の言葉に言い返すことができなくて、さっきまで寝落ちしていた自分の席に戻り、構造計算の準備と、元請けに報告するための資料作りを同時に進める。どちらにせよ、これでダメなら手はないのだ。シミュレーションが上手くいく前提で作業するしかない。

「一体全体、どうしたらこんな構造思いつくんですか。まさか、夢で見たとか？」

そんな言葉の間にも遥のパソコンの画面には俺が書きなぐった橋が精緻なモデルとして再現されていく。

「半分当たりだな。昔の夢を見たんだ」

「夢、ですか？」

「天の川に、眼鏡で橋を架ける夢」

遥から返事はない。あまりにも突拍子のない話だから流石に呆れられてしまっただろうか。俺が遥の立場だったら、そんなものに付き合わせやがって、くらい言いたくなるだろうし。

「その時、約束しちまってさ。天の川に橋を架けてみせるって。地元で橋を架けてやりたいって思いはもちろんあるけど、地上で橋を架けることができなかつたら、天の川に橋を架けるなんて夢のまた夢だろって思うんだ」

まともに考えれば、天の川に橋を架けるなんてどこまでいっても夢のまた夢だ。だけど、そんな夢を追いかけて俺は建設コンサルタントの会社に入って、橋梁の設計を行っている。ずっとずっと橋を架けていけば、いつか辿り着くんじゃないかなんていう子供心を忘れられないでいる。

「宮津先輩」

オフィスから音が消える。さっきまで絶え間なく動いていた遥の手が止まっていた。

「悪い。邪魔した」

一秒でも時間が惜しい時に、身の上話なんて。だけど、遥は静かに首を横に振る。

「一つお願いがあります」

「ん？」

普段は迷うことない遥が珍しく何か悩むように口を開けたり閉じたりする。やがて、意を決したようにギュッと手を握りしめて、体ごとこちらに向き直った。

「この眼鏡橋が架かったら、本土の方から一緒に橋を渡って星を見に行ってくれませんか？」

「星を？」

「ご存じないですか？ この島には星が綺麗に見えることで知る人ぞ知るキャンプ場があるんです」

「そりゃあ、地元だし、知ってるけど……」

むしろ、何でそんな場所のことを遥は知っているのだろうか。俺は地元だから知っているけ

ど、遥は本土出身のはずだ。もちろん、今でも船で本土と島を行き来することはできるから、何かの機会にキャンプ場に行ったことがあるのかもしれないけど。

その瞬間、パチリと欠けたピースがはまる感じがした。雨の夜、眼鏡を空に掲げていた女の子。その姿が遥かと重なった。現実の遥がくすりとはにかむ。

「就活してる時、説明会の会場で宮津先輩を見かけて。もしかして、この人は七夕の夜の約束を本当に守り続けてるんじゃないかと思ったんです」

「じゃあ、あの時の女の子は……」

遥がツカツカと俺の目の前まで近づいて、俺にかけていた眼鏡をスッと手に取った。それをそのまま自分の目元に当ててみせる。

雨の夜、傘もささずに空を見上げて、ただただ織姫と彦星の再会を願っていた優しい女の子。

「ありがとうございます。あんな夢みたいな約束を、忘れずにいてくれて」

「いや、でも。まさか同じ会社にいたなんて……」

「あれれ、宮津先輩、自分で言ったこと忘れちゃったんですか？」

遥がイタズラっぽく笑うと、片手で眼鏡の端を持って天井に向かって掲げてみせる。促されるように反対側を支える。

「橋は両側から支えた方がしっかりするんですよ」

「……ああ、そうだな」

「じゃあ、まずは目の前の橋から架けちゃいましょうか」

その言葉が契機となって、俺たちは作業に戻る。

このところ胸の中に立ち込めていた暗雲には切れ間ができて、キラキラと光る橋が架かっていた。